

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十一年三月五日千葉県君津

郡佐貫町八幡で出生

現住所 千葉県富津市八幡

軍歴 昭和十八年三月十三日 満州第

四四八部隊へ入隊

満州孫呉にて敗戦

入ソ年月日 昭和二十年八月三十日

引揚年月日 昭和二十二年六月

収容地名 ライチハ

引揚後は自衛隊に停年まで勤務

全抑協運動に役員として参加

富津市の「飢と寒さと強制労働」編集に際し編

集委員として活躍

(千葉県 伊藤 千次)

戦時中、戦後のシベリア回想

千葉県 林 興 一

学徒報国隊の腕章を付けて千葉から鶴見の日本鋼管造船所に動員されていた。作業は、海防艦の製造、特殊高速船（肉弾戦用）製造の協力である。午前八時より午後五時まで戦場の空気は緊張でいっぱいである。その戦場に南方戦線で捕虜になった。カナダ兵が二百人ほど労働させられていた。ほとんど身長一七〇センチぐらいである。食事が合わないのか、下痢に苦しんでいる様である。虚ろの顔々が物陰で「サボって」いた。そんな行動を監視する係が叱責労働させていた。戦争と平和、戦勝国の学生といえどもこの現実、悶々もんもんの中に終着駅千葉であった。それから二、三日その光景が脳裏から消えなかったが、ちょうど六十三年前の学徒出陣の壮行会を想起した。小雨降る中、祖国日本の命運賭けた戦争に一切の感傷を捨て莞爾かんじと

して、海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍、空行かば雲そむ屍に送られて、神宮の森の壮行会の有史以来の緊張、莊嚴を極めた。思い出の一頁である。与謝野晶子の、君、死にたもうことなかれの詩の心か、以心伝心、雪崩のごとく落ちた女学生、まだ脳裏に離れない。それから連日、東京駅は、北は北海道、南は九州、沖縄の先輩、同僚の帰郷する歓送の渦でいっぱいであった。私も最後に佐倉入隊一週間後満州「ハイラル」に派遣、直に幹部候補生として集合教育、教育中、内地が米国のB 29の空襲を受け、あるいはソ連の雲行きが危機との情報で原隊復帰で興安嶺に配属された、が武装諜者（スパイ）の跳梁をほしのままにし、関東軍の威信は全く無しの状況でソ連の飛行機が時々偵察に来た。日本の飛行機は見えない。なぜか、なぜか、不安が募る一方である。やがて指揮官の命令が出た。「積極的攻撃はするな」と愕然とした将兵の顔々、そんな戦争があるか玉砕か？

近くには二千人程度、二カ月籠城出来る陣地が

あるので皆不可解千万の形相である。そして次に来る大いなる不安、予測出来ない。終戦か敗戦か玉砕か犬死か。日本は、しかし東條英樹陸軍大臣の言は「未だ日本は敗れたるを知りません、皇祖皇崇の神靈上にあり」走馬灯の様に過る。昭和二十（一九四五）年八月十五日終戦、軍旗を涙して焼却、興安嶺の陣地を下山、武装解除、ソ連軍の管理下に。人事係の曹長か「あんなになって、こんなになって、そんなになったのよー」と淋しく口ずさんでいた。

ヤポンスキー（日本人）スコルダモイ東京（もう直に東京に帰れる）と皆を喜ばせた。しかし待てよ、今回の戦争参加にしても一九四五年八月九日『日ソ中立条約』を無視し火事場泥棒的に侵攻し、関東軍六十万在留邦人をも欺瞞しようとしていることは明らかである。がもしや、と希望的な期待も、ちょっと捨て難い。しかし今にして見れば嘘八百で何一つ真実は無。学生時代（報国隊のとき）のカナダの捕虜の事を思い出す。いよいよ

よ千人あて貨車に割当てられ順次出発した我々は一カ月遅れて出発した。そのとき先発隊は釜山に着いた。あるいは九州にと誠しやかに発表していたが我々の貨車は南部地域で八路軍の襲撃があったので安全確保のため、ウラジオストクから元気で日本へ帰って父母兄弟に会って下さい、と入念な説明であった。まず「チタ駅」で東か、西か、東なら「ウラジオ」西なら「シベリア」前に機関車がつけばウラジオ、後につけばシベリア色々な予測が飛んだ。嘘つきのソ連だ。腹を決めて待つこと三十分、連続のショックか前後一回ずつ、何と前後に機関車が付いた。途中で切り離されるのかと一瞬不安だったが確認出来ない。輸送されている貨車は牛馬を運ぶ貨車で窓は高いところから左右一個ずつ。その窓も外から針金でからんである。次の小休止のときに確認したら確かに前後に機関車、西へ西へシベリアへと間違いなく進んでいた。正に屠殺場行きの牛馬の運命のごとく静寂そのもの。それぞれ親、兄弟の将来、自分達の行方、運

命は。一日一食の粥も喉を通らない。

語る気力も無いやけっぱちである。三日くらい過ぎて、誰か「成る様にしか成らねーよ、勝手にしやがれ、ロスケノヤロー、バカヤロー」(ロシア語では「ヨーボネ、ブロー」)もう朝、夕は大変冷え込んで、吐く息が白色である。手、足も冷たい。諦観ていかんがついてか、そこかしこ声が揚って賑やかになってきた。とにかく、貨車のスピードは遅い。トンネルが少なくカーブ多い、前の機関車が牽引する、後の機関車が押すというシベリア鉄道の大動脈である。チタの分岐点の謎がようやく分かった。シベリアの原野に千数百カ所の日本人捕虜収容所の一つウランウデ本部に近い所に下車した。二日後編成された五百人で行先知れずの行軍が始まった。十人程度の警戒兵、それぞれ三十六連発の自動小銃を構え騎馬の隊長一人、一時間半で十五分の休憩、食事はいつか分からない、毎日自動車が進んで来る時間でほとんど一日一食。最初は今日も生きてた、満天の星がとても綺麗だ

つたが三日目から全然分らない。もう歩けない、皆に迷惑をかけるからここに置いて行ってくれ、或は殺してくれの言葉がそこかしこ。それでもソ連兵はどこまでとは全く言わない。食事車が指示を持つて来るといふ。行軍中ふらふらと道路から逸脱するもの、佇立^{ちまり}して動かぬもの、殺してくれと連呼して座り込むもの、警戒兵が威嚇して銃口を向けており危機一髪である。とっさに休憩をとる。その状況を知りながら無常にも出発である。仕方なしに両方から肩を入れての行軍である。次の休憩所で話を聞けばある日、ソ連兵から甘味品を配給するから〇〇学校の前へ集合の連絡があった。ソ連兵が危険だからとほとんど各家庭は男が行ったところ、甘味品は嘘で男性を一網打尽で「シベリア」へ、涙を流して説明した満の社長様でした。

同朋のために肩を交互に交替して一カ月、ようやく「ホーリンスク」収容所に入った。

「秋の陽をまともに浴びて、行く道の果さへ知

らずシベリアの奥深く来つるものかな あ、千里」

建物は、形は成しているが丸太小屋、シベリアの流刑地の跡で南京虫の巣である。それでも露天に仰向で眠るより人間的でホッとした。丸一日、死んだ様に眠った。いよいよ明日から作業である。限り無く続く、天然の大森林の伐採作業一人当りの作業「ノルマ」(ノルマとは責任作業量)は六・五五リユーベ、六人一組で作業するから合計その六倍が責任量である。それが達成できなければ営倉である。営倉は野天で零下六〇〜七五度、そして半減食と厳しい。しかし「ハラシヨラポータ」(良く働け)「ノルマ」を完遂すれば、東京ダモイが早くなると欺瞞する。現実の体力からして到底できない「ノルマ」である。十月より零下四〇〜六〇度、吐く息も凍り、睫毛も凍り、心も凍り、身体は栄養失調「十キロ〜二十キロ」減り、瘦身古木のごとく、目だけ大きい、嘘と知りながらも一日も早く祖国日本に帰りたい。行軍中の満天の

星に、願っていた。ホームシックが高じて逃亡者が遂に出た。空しさ、悲しさいっぱいでした。無言、狼の餌食となった戦友、万斛の涙々。シベリアバイカル湖から祖国日本は遠い遠い遠い。

休日は一切無しの重労働、発熱三八度以上か酷い外傷だけ。神経痛、リウマチは問題外作業忌避であると。日本人の常識は通じない、吃驚仰天、こんな国があるのか。こんな国に敗けたとは残念、無念、現実捕虜！ 極寒の中の重労働と飢、正にこの世の地獄、作業中の事故死、歩行中、就寝中の死亡、枚挙に暇なし、総員五百人中自己管理、出来得るものなんと十五人となりました。全く筆舌、言語に絶する生活を強制されました。過去どんな明文化された条約が締結されてあっても相手国が常識が無ければ紙屑同然である。

国家存亡の折、学徒出陣、青春を国家に捧げました莞爾として散華した先輩、同僚、何の顔があつて見える。感情ひとしおのものがあつてシベリア慰霊訪問団に参加させて頂いております。

- 一 モスクワ、その近辺
- 二 ハバロフスク、その近辺
- 三 クラスノヤルスク、その近辺
- 四 イルクーツク、その近辺

それぞれ八月中、一週間の予定で去年はイルクーツク方面で新潟県の農協さんの方々観光ツアーと一緒でした。我々慰霊団に、心からご苦勞様と声がかかりました。「イルクーツク」のホテルで同行の皆さんの御理解と御協力で私の収容されていた、収容所跡付近の墓地に墓参しようと決定頂き翌々日、出発した。

- 一 思い出は数々ですが拙い短歌を数首
- 二 煌く星座は物云わぬ 祖国日本は彼方かと語り続けて夜を明せり
- 三 バイカルの湖面に映る月悲し
- 四 共に祖国へと泣きしが浮ぶ
- 三 時差無しイルクーツクの夜は遅し
- 四 明日は一千坪の戦友の墓地尋ねる
- 四 大草原にシベリア鳥は群をなし

墓参のバスを乱れつつ追う

五 遙遙と尋ね来たるに赤トンボ

群るるが悲し唯々合掌

六 七竈の花乱れ咲く丘の上

土饅頭の此処かしこ 大地に滲む

戦友の無念さ

七 墓参のバスを追かけ乱れ飛ぶ鴉

トウキョウダモイと悲願の戦友かも

八 名も知らぬ 虫の音悲し

夜もすがら泣く 戦友の声と思はる

この記録誌が次世代の若者の糧となり、愚劣な戦争のない平和が地球上に招来される様、英知を結集されること、祈るや切である。

【執筆者の紹介】

昭和二十三年十月 亡き兄の家業従事

復員後、富津市大佐消防団に入団、分団長本部

付部長拝命、区長三期拝命、商工会役員等を経て

富津市市議員三期、その後富津市経済常任水道

委員、木更津税務署税務懇話会々長、千葉県青色申告会理事、千葉県税制委員、木更津青色申告会会長

住所 千葉県富津市佐貫

(千葉県 伊藤 千次)